こころの問診票の実践と分析
～児童生徒の登校意欲に及ぼす様々な心理要因～

緒　方　宏　明・山　﨑　沙奈江*

Practice and Analysis of a Mental Health Questionnaire: Various Psychological Factors that Affect Children's and Students' Willingness to Attend School

Hiroaki Ogata・Sanae Yamasaki

「こころの問診票」（緒方・小川内，2013a）は、2013年度より日本学校心理士会熊本支部で開発してきた心理教育的アセスメントのツール（チェックリスト）である。子どもの心理状態を個人票によって見える化することや学校現場の教師が子どもの心の状況を理解する視点を持つこと、対応につなげやすくすることなどを主な目的としている（緒方，2019）。この問診票は、筆者が勤務する九州ルーテル学院大学と学校心理士会熊本支部、そして熊本県内複数の教育委員会との連携により児童生徒への実践を続けている。こうした連携において得られたデータを基に、児童生徒の状況を分析することも本研究のねらいである。今回は、特に不登校と直結する「登校意欲」について焦点を当て、登校意欲を低下させる様々な心理要因を分析することを目的とする。

Ⅰ．問題と目的

「こころの問診票」（緒方・小川内，2013a）は、心理教育的アセスメントのツール(チェックリスト)であり、14の内容項目（60の質問）により、児童生徒の心理状態を多面的に理解するための質問紙である。現時点（2020年度）で熊本県内の２教育委員会との連携・協力を得て、小学校37校、中学校22校、さらに学校心理士会熊本支部会員により２高等学校において活用されている。今後、導入予定の教育委員会もあり、実施方法もマークシートやタブレットによる入力が可能になったため、その利用は年々拡大している。

また、我々学校をサポートする立場としては、心の問診票の見方や児童生徒を理解する様々な視点など心理教育的アセスメントのあり方や、苦戦する児童生徒への対応のあり方等について、教育委員会主催の研修会や校内研修会、「こころの問診票」の結果をフィードバックする機会などを通して提案をしたり、学校現場の状況や要望などの情報共有を図ったりしてきた。

本問診票は、児童生徒の心の状態を尺度として測定するのではなく、あくまでも問診票として児童生徒の困り感を理解しようとするためのものである。また、学校現場の教師が、児童生徒の困り感をどのように理解し、どのように対応するかを分かりやすくするため、児童生徒の心理状況を可視化するとともに、いじめや不登校、家庭における虐待、自殺などの可能性を複数の質問項目から割り出し、個人票の所見欄に明示するようにしている。そして、その内容は、学校の教職員、学校をサポートする心理や福祉の専門家（スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等)、そして医療の専門家が共有しやすいのも、本問診票の特色である（緒方，2019)。

本研究は、「こころの問診票」の実践状況の報告や実践のあり方の追究、そして得られたデータを基に問診票の改善を行い、児童生徒の実態を分析することを目的とし、継続的に取り組んでいく。特に今回

＊熊本市東区役所保健子ども課、日本学校心理士会熊本支部

は、最も大きな教育現場の課題である不登校に焦点を当て、児童生徒の登校意欲低下がどのような要因と関係しているのかを分析し、不登校に繋がる要因について追究することを目的とする。

Ⅱ．方法

研究を進めるに当たっては、教育委員会と連携を図りながら不登校の児童生徒のデータを共有し分析することが最も効果的ではあるが、問診票の項目に、登校意欲についての質問があるので、これを生かしながら他の要因との関係を分析する方法をとる。

１　分析を行うデータについて

2019年度より、筆者（緒方）が勤務する九州ルーテル学院大学と包括連携協定を結んでいるK市において2019年６月から７月にかけて実施したデータによる。K市の全小中学校（小学校10校、中学校５校）にマークシートで実施し、小学校３年生から中学校３年生までの合計2541名（男子1272名，女子1269名）の有効なデータが得られた。

２　分析の方法

登校の意欲に関する質問項目「学校に行く気になれない」（５非常に良くあてはまるから１全くあてはまらないまでの５段階で回答）を「登校意欲低下」ととらえ、登校意欲低下を従属変数とし、相関分析および重回帰分析を行った。

Ⅲ．結果

【予備的分析】登校意欲低下における学年差および性差

学校種ごとに、登校意欲低下における学年・性差の有意差の有無を確認するものである。

表１に示すとおり、小学校３年生から中学３年生について、登校意欲低下の得点を用いてA：学年、B：性を要因とする２要因分散分析を行った。その結果、学年は$F(6, 2527)=2.07$，$p=.05$であり、学年による主効果は0.10％水準で有意傾向が認められたが、性差は$F(6, 2527)=0.10$，$p=.75$であり、性の主効果は認められなかった。この結果から、以後の分析は学年差および性差を考慮せずに行うこととする。

表１　登校意欲低下における学年×性差の平均値および分散分析結果（*F*値）

学年	性別	人数	登校意欲低下 M	登校意欲低下 SD
小学3年生	男子	179	2.26	1.43
	女子	183	2.10	1.37
小学4年生	男子	181	2.21	1.36
	女子	172	2.29	1.43
小学5年生	男子	180	2.13	1.33
	女子	169	2.22	1.27
小学6年生	男子	164	2.35	1.23
	女子	195	2.12	1.15
中学1年生	男子	206	2.02	1.27
	女子	207	2.12	1.14
中学2年生	男子	167	2.25	1.32
	女子	193	2.52	1.33
中学3年生	男子	195	2.17	1.24
	女子	150	2.15	1.14
検定結果			*F*値（*df*=6,2527）	
学年の主効果			2.07†	
性差の主効果			0.10 ns	
学年×性差			1.58 ns	

†$p < .10$

１　登校意欲低下と他項目の相関関係

ここでは「登校意欲低下」と「こころの問診票」における内容項目全体との相関を確認した。その結果、特に有意な相関が認められた①「心の健康」、②「性格傾向」、③「行動の特性」、④「学習」の４項目について結果を記す。

(1)　「心の健康状態」と登校意欲低下

こころの問診票では、「心の健康状態」を1）抑うつ、2）心の外傷、3）自己肯定感の３項目にまとめている。心の健康状態との相関分析結果を表２に示す。３項目それぞれにおける「登校意欲低下」との関係においては、いずれも１％水準で有意な中程度の正の相関が認められた。

表２　「心の健康」と登校意欲低下との相関係数（*r*）

	心の健康状態 抑うつ	心の健康状態 外傷	心の健康状態 自己肯定感
登校意欲低下（心の健康）	.47 **	.40 **	.38 **
抑うつ		.49 **	.53 **
外傷			.40 **

** $p < .01$

(2)　「性格傾向」と登校意欲低下

こころの問診票では1)規範、2)他者受容、3)見通し、4) 自由、5) 傷つき、6) 情操の６項目を「性格傾向」としてまとめている。そこで性格傾向との相関分析結果を表３に示す。６項目それぞれにおける「登校意欲低下」との関係は、「規範」、「他者受容」、「見通し」、「自由」、「情操」においてはいずれも１％水準で有意な弱い負の相関が示され、「傷つき」においては１％水準で有意な弱い正の相関が示された。

表３　「性格傾向」と登校意欲低下との相関係数（r）

	性格傾向					
	規範	他者受容	見通し	自由	傷つき	情操
登校意欲低下（性格傾向）	−.11 **	−.05 **	−.17 **	−.14 **	.24 **	−.08 **
規範		.45 **	.50 **	.34 **	.21 **	.35 **
他者受容			.42 **	.30 **	.30 **	.36 **
見通し				.40 **	.04 **	.37 **
自由					.18 **	.42 **
傷つき						.30 **

** $p < .01$

(3)　「行動特性」と登校意欲低下

こころの問診票では1)注意多動、2)自閉、3)素行、4)反抗の４項目を「行動特性」としてまとめている。そこで行動特性との相関分析結果を表４に示す。４項目それぞれにおける「登校意欲低下」との関係は、「規範」、「自閉」、「素行」、「反抗」においてはいずれも１％水準で有意な中程度の正の相関が示された。

表４　「行動特性」と登校意欲低下との相関係数（r）

	行動特性			
	注意多動	自閉	素行	反抗
登校意欲低下（行動特性）	.38 **	.41 **	.37 **	.39 **
注意多動		.52 **	.56 **	.50 **
自閉			.44 **	.42 **
素行				.52 **

** $p < .01$

(4)　「学習」と登校意欲低下

こころの問診票では1) 計算、2) 書き、3) 読み、4)学習全般の４項目を「学習」としてまとめている。そこで学習との相関分析結果を表５に示す。４項目それぞれにおける「登校意欲低下」との関係は、「計算」、「書き」、「読み」においては１％水準で有意な弱い負の相関が示され、「学習全般」においては、１％水準で有意な中程度の正の相関が示された。

表５　「学習」と登校意欲低下との相関係数（r）

	学習			
	計算	書き	読み	全般
登校意欲低下（学習）	.30 **	.30 **	.26 **	.44 **
計算		.35 **	.32 **	.51 **
書き			.47 **	.40 **
読み				.45 **

** $p < .01$

２．各項目が登校意欲低下に与える影響度の検討

次に、「心の健康状態」、「性格傾向」、「行動特性」、「学習」の各項目を説明変数に、登校意欲低下を目的変数として強制投入法による重回帰分析を行った。その結果をもとにパス図を作成した（図１～図４）。決定係数R^2と有意な標準偏回帰係数（正の影響は実線で、負の影響は点線）の値を図の中に示した。

(1)　「心の健康状態」と登校意欲低下

「心の健康状態」の構成項目である「抑うつ」、「外傷」（心の傷）、「自己肯定感」はいずれも登校意欲低下に対して１％水準で有意な標準偏回帰係数（β）が得られている（抑うつ：VIF=1.60, 外傷：VIF=1.36, 自己肯定感：VIF=1.45）。説明率を示すR^2値は20％を超えており、登校意欲低下に対し一定の影響度を持つことが確認された。

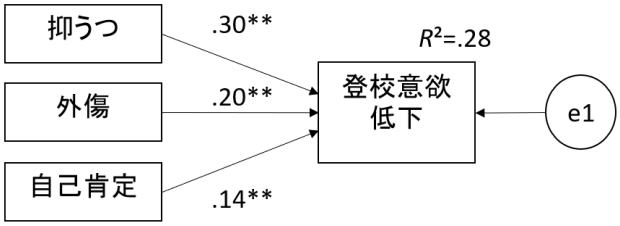

図１　「心の健康状態」と登校意欲低下との重回帰分析結果

(2)　「性格傾向」と登校意欲低下

有意な結果が示された「規範」、「見通し」、「自由」、「情操」は、「規範意識のある行動」、や「見通しを持った計画的な行動」、「自由な表現や好奇心」、「価値の高いものや立派な行動への感動」などの内容であり、自身の性格傾向を肯定的に捉えている質問項目であると言える。これらの項目は登校意欲低下に対し、負の標準偏回帰係数（β）が１％水準で有意であった（規範：VIF=1.53, 見通し：VIF=1.59, 自由：VIF=1.35, 傷つき：VIF=1.20, 情操：VIF=1.42）。

一方、「傷つき」は「傷つきやすく、つい考えすぎる」という内容であり、登校意欲低下に対し、正の標準偏回帰係数（β）が１％水準で有意であった（傷つき：VIF=1.20）。R^2値は12％であり、強くはないが一定の影響度を持つことが示された。

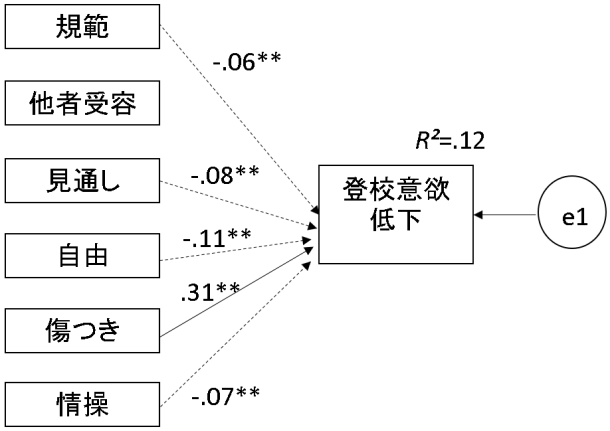

図２　「性格傾向」と登校意欲低下との重回帰分析結果

(3)　「行動特性」と登校意欲低下

「行動特性」の構成項目である４項目すべてにおいて１％水準で有意な正の標準偏回帰係数（β）が得られており、特に「友達の目を見て会話するのが苦手である」という内容の「自閉」はこれらの中でも強い影響度を持つことが示された（注意多動：VIF=1.78，自閉：VIF=1.46，素行：VIF=1.68，反抗：VIF=1.54）。R^2値は25％であり、登校意欲低下に対し、一定の影響度を持つことが明らかになった。

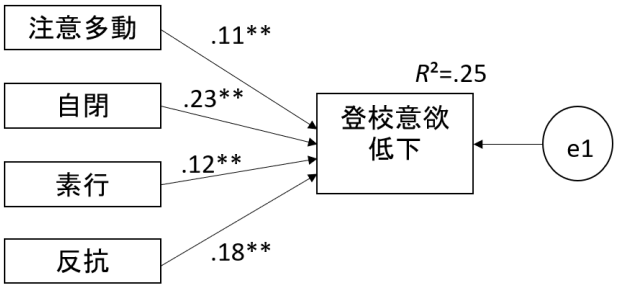

図３　「行動特性」と登校意欲低下との重回帰分析結果

(4)　「学習」と登校意欲低下

「読み」を除く３項目については、登校意欲低下に対し１％水準で有意な標準偏回帰係数（β）が得られた（計算：VIF=1.40，書き：VIF=1.39，学習全般：VIF=1.59）。特に「授業がよくわからない」という内容である「学習全般」は、ほかの項目よりも登校意欲低下に対し、高い影響度を持つことが示された。

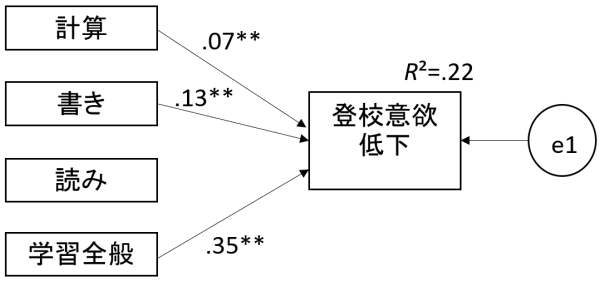

図４　「学習」と登校意欲低下との重回帰分析結果

Ⅳ．考察

本稿では、登校意欲に関する質問項目「学校に行く気になれない」を「登校意欲低下」として分析を行った。分析に当たっては、学年および性差との関係も確認すべきであるが、予備的分析において両者との有意な関係は認められなかったので、学年差および性差を考慮せずに分析を進めた。

１．登校意欲低下と他項目との相関関係および影響度

「こころの問診票」は14の内容項目、合計60の質問項目で構成されているが（緒方・小川内，2013a・2013b）、「登校意欲低下」とすべての内容項目との相関を確認した結果、有意な相関が認められた①「心の健康」、②「性格傾向」、③「行動の特性」、④「学習」の４項目について分析を行った。

(1)　「心の健康状態」と登校意欲低下

「心の健康状態」は「抑うつ」、「外傷」（心の傷）、「自己肯定感」の３つの項目から構成されており、この３項目それぞれに登校意欲低下との正の相関（１％水準で中程度の相関）が認められた。また、重回帰分析では３つの項目すべてが登校意欲低下に影響することが示され、係数の大きさから、特に「抑うつ」が高いものほど登校意欲が低下することが明らかになった。

「抑うつ」については、心理的なエネルギーが低下している状況であり、これが登校意欲低下に影響を及ぼしていることは十分に考えられる。「外傷」については、その出来事が学校で生じていることであれば勿論登校意欲低下に繋がるものであるし、家庭

等で生じている「外傷」（虐待等）においても、それが「抑うつ」を伴うものであれば登校意欲に影響を及ぼすことは十分に考えられる。「自己肯定感」においても同様の結果が示されたが、「抑うつ」の状況において「自己肯定感」が低下することは、「自己肯定感」に関する内容がベックの抑うつ尺度（BDI-Ⅱ；小嶋・古川，2003）やZung（1965）の自己評価式抑うつ尺度であるSDS（Self-rating Depression Scale）にも含まれていることからも妥当な結果であるといえる。実際に「抑うつ」と「自己肯定感」の間には強い相関が認められていることからも登校意欲は心の健康状態、つまり精神的健康と連動して低下することが考えられる。こうしたことから登校意欲低下にも関係が認められたのであろう。

(2)　「性格傾向」と登校意欲低下

こころの問診票では「性格傾向」を1)「規範」、2)「他者受容」、3)「見通し」、4)「自由」、5)「傷つき」（傷つきやすさ）、6)「情操」の６項目から構成されており、この６項目それぞれに１％水準の有意な弱い相関が認められた。「傷つき」についてはネガティブな項目であり登校意欲との正の相関、それ以外の５項目はポジティブな項目であるので、負の相関が示されたと考えられる。重回帰分析では、「他者受容」を除くすべての項目で有意な標準偏回帰係数が得られている。中でも、「傷つき」は登校意欲低下に与える影響度が最も高いことが示された。このことは、傷つきやすい傾向を持つ者はネガティブな出来事に遭遇した際、学校への不適応を起こしやすいことを示唆した結果である。

性格傾向は、心の健康状態のように変化していくものではないため、「規範」「他者受容」「見通し」「自由」「情操」が低く、「傷つきやすさ」が高い傾向持つ児童生徒には、登校意欲低下を引き起こす基盤になると考えられる。

(3)　「行動の特性」と登校意欲低下

「行動の特性」は「注意多動」、「自閉」、「素行」、「反抗」の４項目で構成されている。「注意多動」はADHDの傾向を、「自閉」は自閉スペクトラム症の傾向、「素行」は素行症、そして「反抗」は反抗挑発症を基に考えた項目ではあるが、これらはその傾向を確認する項目であり、診断する尺度ではないことを前提としている（緒方・小川内，2013b）。今回の結果では、この４項目それぞれに１％水準で有意な中程度の正の相関が示されている。同様に重回帰分析においても、４項目すべてが登校意欲低下に影響を及ぼしていることが明らかにされた。

自閉傾向の児童生徒が学校生活で苦戦することは、これまでにも様々な分野で指摘されてきたが、「注意多動」「素行」「反抗」傾向の児童生徒も苦戦していることが窺える結果である。「注意多動」つまりADHD傾向の児童生徒は、授業に集中できないなどのストレスが登校意欲低下に影響を及ぼしていると考えられる。また、「素行」つまり素行が悪い傾向は、友達とのトラブルや、それによって教師に注意されることなどがストレスとなり、登校意欲低下に繋がっていることが考えられる。そして「反抗」については、学校における教師等との信頼関係の低下や不信感が授業等での関わりの中でストレスになり、反抗的な態度に及ぶことが考えられ、そのストレスは登校意欲低下にも繋がるのであろう。また、DSM-5（2014）においては、ADHDと素行症、素行症と反抗挑発症の関係が示されており、これらが併発して登校意欲低下を引き起こすことも考えられる。

(4)　「学習」と登校意欲低下

「学習」は限局性学習症や知的発達症を基にした内容項目でありDSM-5（2014）、「計算」（計算の苦手さ）、「書き」（書くことの苦手さ）、「読み」（読むことの苦手さ）、そして「全般」（授業全般での苦戦）としている（緒方・小川内，2013b）。本項目においても、それぞれに１％水準での有意な相関が確認されたが、「計算」「書き」「読み」では弱い相関関係、「全般」では中程度の相関関係が示されている。重回帰分析では、「読み」以外の３項目において、登校意欲低下に影響を持つことが示された。

学校生活においては学習活動（授業）が中心であり、自分の苦手とする「計算」「書き」「読み」を必要とする授業科目には特別なストレスがかかることと思われる。特に知的発達症を抱え授業全般が解りにくい状況であれば、そうした児童生徒は１日中苦痛に耐えなければならず、それが登校意欲低下に大きく影響していることは当然の結果と考えられる。

２．まとめと今後の課題

本稿では、不登校の要因について、「こころの問診票」の質問項目「学校に行く気になれない」を「登

校意欲低下」、つまり不登校を引き起こす心理状態と捉え、各項目との相関の分析および重回帰分析によって検討を行った。

その結果、登校意欲低下には「心の健康」「性格傾向」「行動特性」「学習」などが影響していることが認められたが、学校に登校していても「登校意欲低下」の高い児童生徒は多く、単純に不登校予備軍と考えてよいかどうかは今後の課題である。実際に不登校となる場合、あるいは不登校が長期化する状況を分析する必要がある。学校現場に一人一台のタブレット端末が行き渡るようになり、不登校の児童生徒に対し家庭で「こころの問診票」を実施できるようになれば、こうした分析も可能になることと期待できる。また、心の問診票を今後さらに精査する上で、スクールカウンセラーなどによる支援の介入前後でどのように変化がみられるかなど問診票の妥当性の検討も必要であろう。

今後は、本テーマでの研究を継続しながら、「抑うつ」の及ぼす影響や「いじめ」、「虐待」、「学級崩壊」等の問題にアプローチできれば幸いである。

謝　辞

本研究（「こころの問診票」実施）に御協力いただいた教育委員会および小学校、中学校の皆様に心より感謝申し上げます。

文　献

アメリカ精神医学会　高橋三郎他訳　2014　DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル　日本精神神経学会監修，医学書院（Amerikan Psychiatric Association 2013 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disoorders Fifth Edition）

緒方宏明・小川内哲生　2013a　こころの問診票　日本学校心理士会熊本支部

緒方宏明・小川内哲生　2013b　「こころの問診票」解説書　日本学校心理士会熊本支部

緒方宏明　2013c　こころの問診票の活用～質問紙の目的及び子どもの抑うつ～日本教育　心理学会第55回総会発表論文集，462.

緒方宏明　2014　こころの問診票の活用～中学校と保育者養成校（短期大学）の比較による実態の一考察～尚絅大学短期大学部子育て研究センター次世代育成研究・児やらい，第11巻，3-16

緒方宏明　2019　こころの問診票の活用～内容および特徴と活用の意義、方法について～　九州ルーテル学院大学紀要論文VISIO，49号，59-65

小嶋雅代・古川壽亮　2003　日本版BDI-Ⅱベック抑うつ質問票―手引　日本文化科学社

資　料

こころの問診票

今日の日付：　年　月　日

この問診票は、あなたのこころの状態をおおまかにつかむためのものです。
全60の質問について、今の自分、最近の自分をありのままに振り返り、次の5段階のどれによく当てはまるか、その番号のマークを塗りつぶしてください。

⑤ 非常によくあてはまる　④ あてはまる　③ どちらとも言えない　② あまりあてはまらない　① 全くあてはまらない

氏名	

1. 記入欄・マーク欄以外には記入しないでください。
2. 鉛筆で、しっかり濃くマークしてください。
3. 間違った場合には、消しゴムで、きれいに消してください。

マーク例

良い例	悪い例
●	✓ ◐ ●

	すうじ	あてはまるすうじ、あるいは男女をぬりつぶす。
年		① ② ③ ④ ⑤ ⑥
組		① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
性別		男 女
番号	10の位	⓪ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨
	1の位	⓪ ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

1 心の健康状態	非常によくあてはまる	あてはまる	どちらとも言えない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
1 夜ぐっすりと眠れない日がある	⑤	④	③	②	①
2 ささいなことで泣いたり泣きたくなることがある	⑤	④	③	②	①
3 朝、学校に行く時に調子が悪くなる	⑤	④	③	②	①
4 気持ちがいっぱいいっぱいの状態である	⑤	④	③	②	①
5 最近、食欲がなくなった	⑤	④	③	②	①
6 自分はまったくだめな人間だと思うことがある	⑤	④	③	②	①
7 自分には自慢できることがない	⑤	④	③	②	①
2 ストレスの場所(いやな気持ちになる場所) ★マークはしている人だけこたえてください					
8 学級にいるとストレス(いやな気持ち)を感じる	⑤	④	③	②	①
★ 9 部活動やクラブチームの活動でストレスを感じる	⑤	④	③	②	①
10 家族(父、母、兄弟、姉妹、祖父母等)のことでストレスを感じる	⑤	④	③	②	①
11 友達のことでストレスを感じる	⑤	④	③	②	①
12 好きな人（異性など）のことでストレスを感じる	⑤	④	③	②	①
★ 13 塾や習い事のことでストレスを感じる	⑤	④	③	②	①
14 勉強のことでストレスを感じる	⑤	④	③	②	①
★ 15 ラインなどのSNSやスマホのサイトなどでストレスを感じる	⑤	④	③	②	①
3 自分の性格					
16 決まりや時間、約束事を守る	⑤	④	③	②	①
17 ふざけている人がいるとき、真面目にしてほしいと思う	⑤	④	③	②	①
18 人には親切で思いやりがある	⑤	④	③	②	①
19 人から何か頼まれるとイヤとは言えない	⑤	④	③	②	①
20 物事をよく考えて冷静に行動することができる	⑤	④	③	②	①
21 見通しを持って自分から行動することができる	⑤	④	③	②	①
22 夢中になって遊んだり取り組んだりする	⑤	④	③	②	①
23 「わあ」「すごい」「かっこいい」などの言葉が自然に出る	⑤	④	③	②	①
24 友達にどう思われているか気になる	⑤	④	③	②	①
25 傷つきやすく、つい考えすぎる	⑤	④	③	②	①
26 美しい花、景色、音楽などに感動する	⑤	④	③	②	①
27 人の親切や思いやり、立派な行動などに感激する	⑤	④	③	②	①
4 生活の習慣					
28 早寝早起きができていない	⑤	④	③	②	①
29 朝ご飯を食べないことがある	⑤	④	③	②	①
30 一日に2時間以上ゲームをする日がある	⑤	④	③	②	①
31 一日に2時間以上動画やSNSに時間をかける日がある	⑤	④	③	②	①

〈うらに進んでください〉

SN-C00714*(714)

	非常によくあてはまる	あてはまる	どちらとも言えない	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
5 行動の特徴①					
32 忘れ物をしたり、物をなくしたりすることがある	⑤	④	③	②	①
33 授業中ついおしゃべりをして注意されることがある	⑤	④	③	②	①
34 じっとしているのは苦手で、イライラしてくる	⑤	④	③	②	①
35 順番を待つことが苦手である	⑤	④	③	②	①
6 行動の特徴②					
36 友達の目を見て会話するのが苦手である	⑤	④	③	②	①
37 友達の言う冗談がわからないことがある	⑤	④	③	②	①
38 よく考えなさいと言われても、どう考えるのかがわからない	⑤	④	③	②	①
39 自分のやり方があるので、それを変更することは難しい	⑤	④	③	②	①
7 行動の特徴③					
40 ついけんかやトラブルを起こしてしまう	⑤	④	③	②	①
41 つい友達に意地悪をしてしまう	⑤	④	③	②	①
8 行動の特徴④					
42 規則(きまり)に従うことに、反抗または拒否することがある	⑤	④	③	②	①
43 つい先生に文句を言いたくなる	⑤	④	③	②	①
9 学習について					
44 以前から計算することが非常に苦手である	⑤	④	③	②	①
45 以前から字を書くのが下手で遅い	⑤	④	③	②	①
46 以前から文章を読むのが苦手で時間がかかる	⑤	④	③	②	①
47 授業がよくわからない	⑤	④	③	②	①
10 やる気					
48 学校に行く気になれない	⑤	④	③	②	①
49 家で勉強しようという気になれない	⑤	④	③	②	①
11 友達関係					
50 休み時間は一人でいることが多い	⑤	④	③	②	①
51 休み時間は仲のよい友達と二人だけでいることが多い	⑤	④	③	②	①
52 休み時間は3人以上の友達でおしゃべりしたり遊んだりしている	⑤	④	③	②	①
53 友達との会話や遊びの中にうまく入っている(溶け込んでいる)	⑤	④	③	②	①
12 学級の状態					
54 クラスのみんなは親切で思いやりがある	⑤	④	③	②	①
55 このクラスは安心で居心地がよい	⑤	④	③	②	①
56 クラスの友達が何を考えているのかわからない	⑤	④	③	②	①
57 クラスで言いたいことが言えない	⑤	④	③	②	①
13 出来事					
58 最近あるいは以前に、いやなことがあった	⑤	④	③	②	①
59 そのいやなことが頭から離れない	⑤	④	③	②	①
60 そのことについて夢を見る	⑤	④	③	②	①

14 学級でよく会話する友達を、次のデジタルマークの数字(よい数字の書き方)で、会話の多い順に3人あげてください。

デジタルマーク記入方法【書き順】 縦棒は上から下↓、横棒は左から右→、方向を正しく記入してください。

よい数字の書き方	わるい数字の書き方
1 2 3 4 5 6 7 8 9 0	7 4 3 9 5 7

	1	2	3
いない場合は書かなくてもいいです。1人でも2人でもかまいません その友達の名簿の番号を上のデジタルマーク記入方法を参考にして書いてください			

〈お疲れさまでした〉 日本学校心理士会熊本支部 九州ルーテル学院大学(予備調査20200401)